

III 整備方針

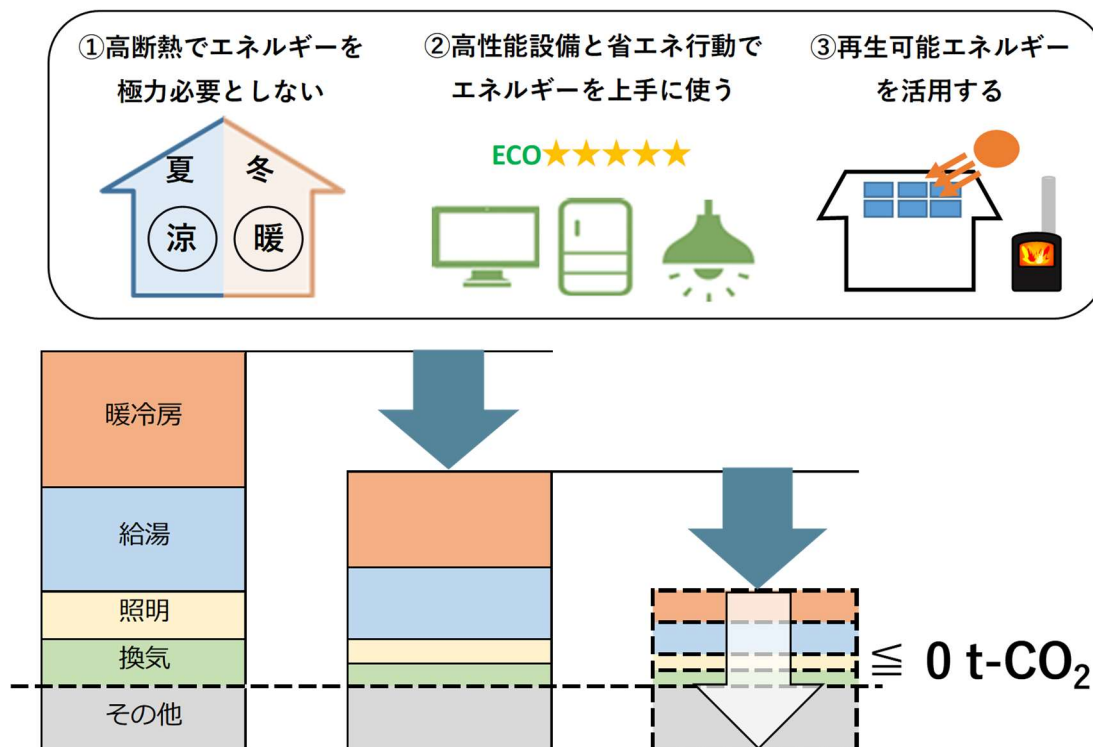
2050 ゼロカーボンを見据えた信州らしい住まいづくりを推進するため、住まい手やつくり手をはじめ、建設からその役割を終えて解体するまでの間にその住宅に関わるすべての関係者が、基本的な視点と考え方を共有することが重要です。

このため、「信州健康ゼロエネ住宅」の整備の方針を示します。

1 ゼロエネルギー化の取組（エネルギーを大切に使う）

長野県ゼロカーボン戦略では、2010年（平成22年）比で、使うエネルギーを7割減らし（省エネルギー）、創るエネルギーを3倍にする（創エネルギー）ことで2050ゼロカーボンの実現を目指すこととしています。

住宅建築においては、運用段階（使用期間）でのゼロエネルギー化の観点から、次のことについて性能向上の検討が必要です。



(1) 省エネルギー（少ないエネルギーで快適な住まい）

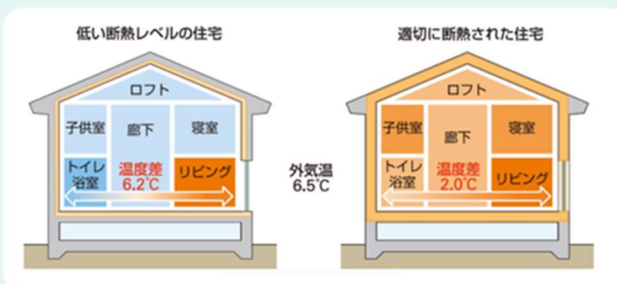
ア 断熱計画の工夫

屋根、外壁及び基礎等並びに開口部にバランスよく十分な断熱・気密を確保することや、開口部の大きさや配置等による季節等に応じた適切な日射の遮蔽・取得により、暖冷房負荷の低減を図る。

コラム：断熱による温熱環境の改善効果

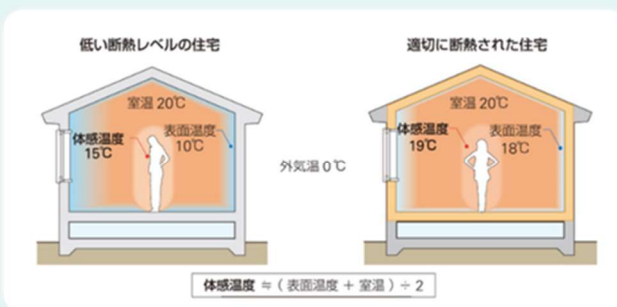
① 部屋間の温度差

断熱性能が高い住宅は、部屋間の温度差が小さくなります。断熱性能が低いとトイレや浴室等と居室の温度差が大きく、ヒートショックの原因にもなります。



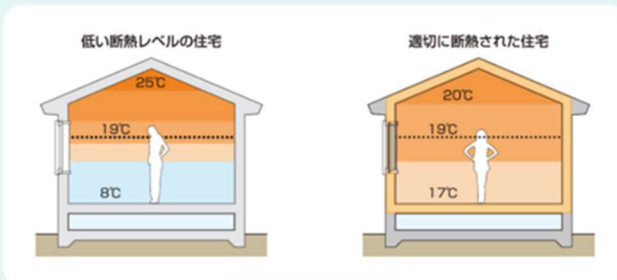
② 体感温度

断熱すると壁などの表面温度が下がりにくくなり、同じ室温でも断熱住宅の方が体感温度は高くなります。体感温度は、表面温度と室温の和のほぼ1/2といわれています。



③ 室内の上下温度差

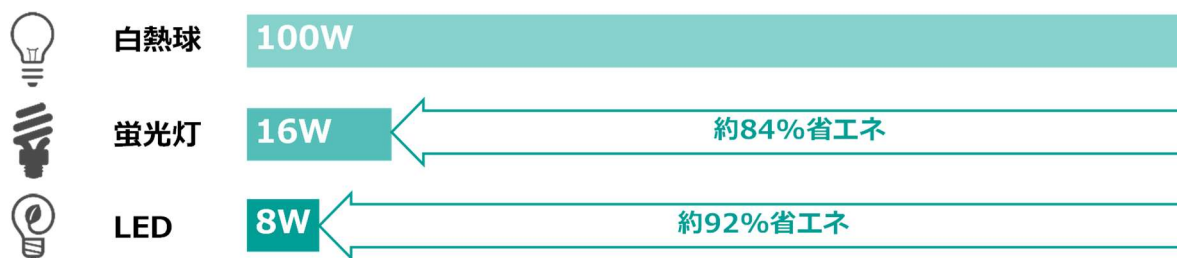
断熱することで、室内の上下温度差が小さくなります。十分に断熱をした住宅では天井付近と床付近の温度差が3°C以内であるのに対して、断熱が不十分な住宅では10°C以上に及ぶ場合があります。



※低い断熱レベルの住宅：昭和55年省エネ基準相当以下
適切に断熱された住宅：平成28年省エネ基準相当
出典：住宅省エネルギー技術講習テキスト

イ 高効率型機器の採用等

エネルギーを消費量の多くを占める暖冷房設備、給湯設備を始めとして、換気設備、照明設備について高効率型の機器を導入するとともに、配管・配線経路や凍結防止の方法を最適化する。



出典：省エネルギー手帳(2017)を基に作成。

図 (例) LED 照明器具の省エネ性能



出典：省エネ型製品情報サイト資料を基に作成。

4 人家族を想定して、ガス給湯器は東京・大阪の外気温、自然冷媒ヒートポンプ式電気給湯器は盛岡の外気温を前提として推計したエネルギー使用量を1次エネルギー換算した値。換算係数は、電気 9.76MJ/kWh、LPG50.8MJ/kgを用いた。

※1：潜熱回収型ガス給湯器（エコジョーズ）

従来はそのまま捨てていた排気ガスに含まれる水蒸気の潜熱（水蒸気が凝縮する際に放出する熱）を、水道水の予熱に利用することにより、熱効率を高めた給湯器です。従来型のガス給湯器が8割程度の熱効率であるのに対し、9割程度の熱効率があるとされています。大きさや設置に必要な場所は、従来型のガス給湯器とほぼ同じです。

※2：自然冷媒ヒートポンプ式電気給湯器（エコキュート）

暖冷房に用いられてきた高効率熱源であるヒートポンプを、給湯器に取り入れたものです。残り湯が多いと放熱によりエネルギー効率が低下するなど、エネルギー効率は、湯の使用量やその増減、給水温度、外気温の影響を受けます。導入に際しライフスタイルや気象条件を踏まえた検討が必要です。

図 (例) 給湯器の年間エネルギー使用量

コラム：L2-Tech(エルツーテック)

L2-Tech(エルツーテック)とは、先導的(Leading)な低炭素技術(Low-carbon Technology)を意味します。

環境省では、低炭素に資する設備・機器等の中でも、CO₂ 削減効果に優れた設備・機器等及びそのうちの最高性能の製品をL2-Techと位置付け、その開発・導入・普及を推進しています。



L2-Tech情報
(環境省)



給湯器



複層ガラス



LED照明



玄関ドア



エアコン



太陽光発電

(2) 再生可能エネルギーの活用（積極的な創エネルギー）

ア 太陽光の利用

(ア)地域特性や近隣条件により、やむを得ない場合を除き、原則、ゼロエネルギーを達成するために必要な容量の太陽光発電設備を設置する（将来計画を含む。）。

(イ)太陽の熱を、給湯・暖房に利用するよう努める。

イ 木質バイオマスの利用

化石燃料や電気による暖房器具等の使用に代えて、カーボンフリーとされる再生可能な木材を利用したペレットストーブ、薪ストーブ等を積極的に使用するよう努める。

ウ 地中熱等の利用

地中熱等の暖冷房等への利用を検討する。

コラム：信州らしさって何？

火のある暮らし

化石燃料を使わず、薪やペレットなどの木質バイオマスエネルギーを活用したストーブは、日々使い続ける中で、環境に貢献しているという意識も感じられ、エコに対する考え方も幅広くなっていくといえます。暖かい炎のゆらめきと心地よい空間。家族が自然と集まって会話が始まる。家族の笑顔と癒しのひととき。お料理にも利用できたりと、生活の豊かさが広がります。



木質ペレット、ペレットストーブの販売店

<https://www.pref.nagano.lg.jp/mokuzai/sangyo/ringyo/kensanzai/seihin/hanbaiten-02.html>



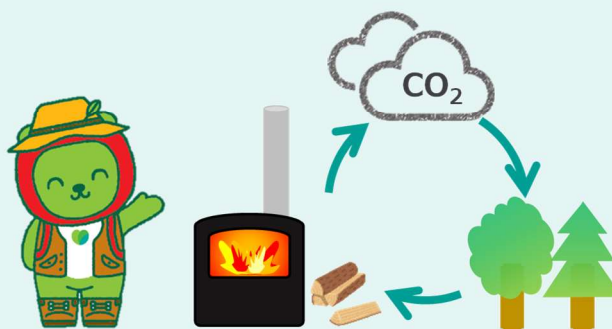
薪の販売店

<https://www.pref.nagano.lg.jp/mokuzai/sangyo/ringyo/kensanzai/seihin/hanbaiten-03.html>



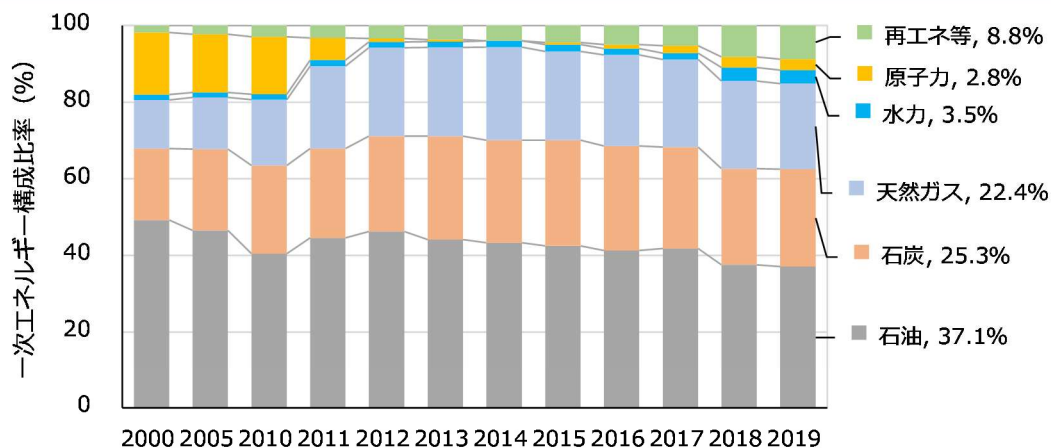
植物は空気中のCO₂を吸収して成長します。薪等の植物由来の燃料を燃やすとCO₂が発生しますが、もともと空気中であつたCO₂が空気中に戻るだけなのでCO₂は増えないとの考えもあります。

若い木ほどCO₂を多く吸収するので、成長した木を伐って、新しい木を植えるサイクルを作ることが大切です。



コラム：低炭素電力

一次エネルギーには、石油、石炭、天然ガスなどの化石燃料(工業分野での利用を含む)の他、太陽光発電、風力発電、水力発電等の再生可能エネルギー発電や原子力発電等、様々な種類があります。



出典:「エネルギー白書2021」を基に作成。

図 一次エネルギー国内供給構成比率の推移

私たちが使う電気は、発電に必要な一次エネルギーの種類によって環境負荷が異なります。電力の供給にどれだけのCO₂を排出しているかを示す数値のことを電力の排出係数といいます。これを引き下げる(=電力の低炭素化)ためには、再生可能エネルギー等の温室効果ガスを発生しないエネルギーを使う発電の比率を高めることが重要です。

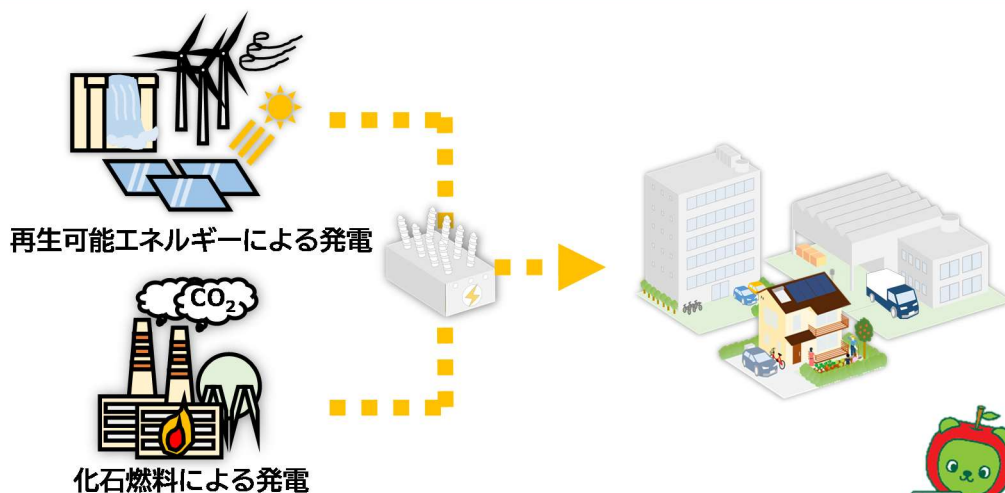


図 私たちの使う電気の由来

2016年度からの電力の小売全面自由化に伴い、私たちは、家庭や商店で使用する電気をライフスタイルや価値観に応じて、自由に選ぶことができるようになりました。小売電気事業者ごとに様々なプランが用意されており、その中には電力の排出係数がゼロ又は低いものも含まれています。低炭素な電力を選択することで、温室効果ガス排出の抑制につながることが期待できます。

2 ゼロカーボン化の取組（ライフサイクルにおける二酸化炭素の排出抑制）

長野県ゼロカーボン戦略の目標達成に向けて、ライフサイクル CO₂ の削減に努めます。

(1) 建設時等の二酸化炭素の排出抑制

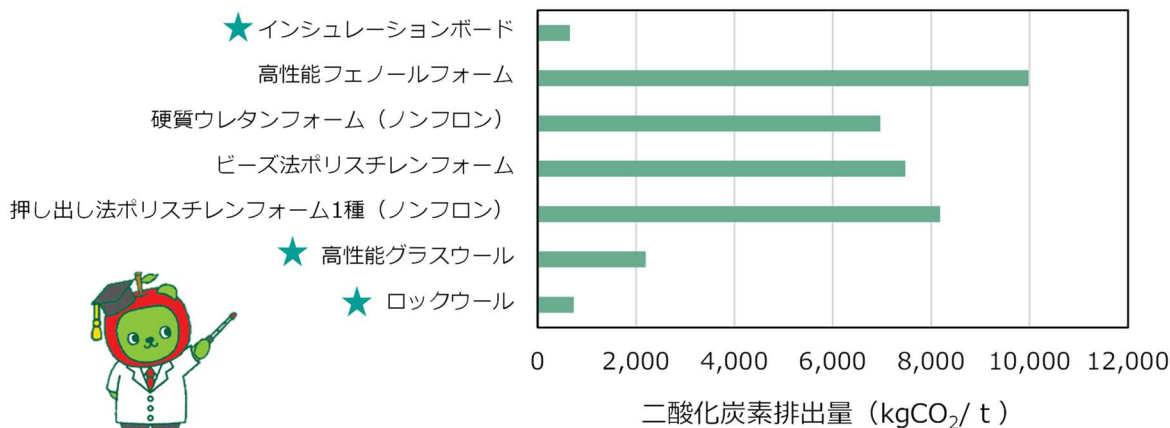
ア 構法・建築資材（断熱材等）の適切な選択

建築構法（構造）は、他の構法に比べて二酸化炭素排出量が少ないとされる木造を積極的に採用する。

また、断熱材等の建築資材は、生産、輸送、廃棄の過程で排出される二酸化炭素排出量を認識した上で、より環境負荷の少ないものを積極的に採用する。

インシュレーションボード、高性能グラスウールやロックウールは、高性能フェノールフォーム等の樹脂製の断熱材に比べて製造時の二酸化炭素排出量が少ない。

（主要な断熱材の特性は巻末の資料1を参照）



出典：「住宅に使用する断熱材種類とLCCO₂排出量に関する研究」（横澤ら、2004）及び「インシュレーションボードのインベントリ分析」（辻本ら、2010）を基に作成。断熱材製造時排出量を対象とした、断熱材単位重量当たりの換算値である。

コラム：リサイクル断熱材

断熱材には、グラスウールやロックウール、ポリスチレンフォームなどの種類があり、大きく繊維系と発泡プラスチック系の2つに分けられます。

また、繊維系にはガラス・鉱物や羊毛・木質繊維などを原料とするものがあります。

このうち、木質繊維系に分類されるセルローズファイバーは、同じく木質繊維系であるインシュレーションボードと同様に製造時の二酸化炭素排出量が少ないと言われていることに加え、新聞紙などを細かく裁断して作られたリサイクル製品であり、限りある資源を有効に利用できるエコな断熱材であると言えます。



新聞古紙を主原料とした建築物の吹込・吹付断熱材
（信州リサイクル製品）

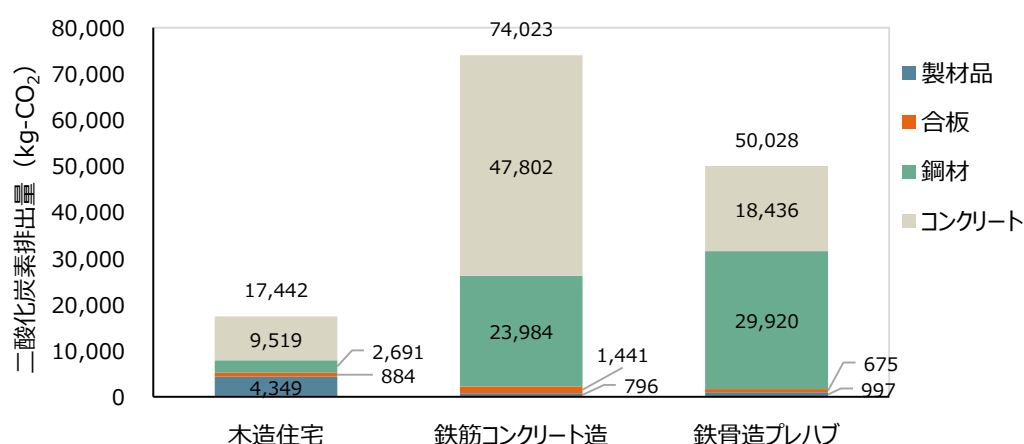
イ 地域資源の利用

(ア) 県産木材・県産建築資材の利用

資材の輸送エネルギーの削減など、環境への負荷が少なく、森林資源の保全・整備や地域内循環の促進に資する県産木材・県産建築資材（県内の工場等で生産、製造された建築資材）を積極的に利用する。

県産木材の利用に当たっては、森林の持つ多面的機能の発揮に資するよう、様々な樹種を適切に利用するよう努める。

木材はコンクリートや鋼材に比べて製造時に排出される二酸化炭素が少ないため、木造住宅は鉄筋コンクリート造や鉄骨造プレハブに比べて、建築に伴う二酸化炭素排出量が少ない。



出典：一般社団法人ウッドマイルズフォーラムウェブサイトを基に作成。

図 住宅 1 棟当たりの二酸化炭素排出量

(イ) 地元建設関係業者の活用

地域の住宅関連産業の活性化と雇用の確保を図るとともに、将来にわたる適切な維持管理体制の確保のため、地元の建設関係業者を積極的に活用する。

コラム：信州木材認証製品

信州木材認証センターでは、優良な長野県産木材製品を信州木材認証製品として認証しています。信州木材認証製品は、長野県産のカラマツ、ヒノキ、スギ、アカマツ等を材料にした柱・壁板などの製品です。乾燥、品質、寸法についての厳しい基準をクリアしている信頼性の高い製品です。



「認証マーク」
厳しい基準をクリアした製品にのみ表示が許される信州木材認証製品の証です。

ウ 資源の有効利用

(フ)再生可能資源の利用

木材等の再生可能資源を構造材や仕上材等に積極的に利用する。また、木質バイオマスを積極的に利用する。

(イ)資源の消費削減

工法等の改善・工夫により、容易に再生できない資源を原材料とする建築資材の量や、使い捨て材、残材、建設発生土等をできる限り少なくし、省資源と廃棄物排出量の削減をするとともに、やむを得ず発生したものは、再使用・再生利用により減量化に努め、適正な処理を行う。

また、省エネルギー型の施工方法を採用するよう努める。

(ウ)資源の再使用・再生利用の促進

建築資材を選択する際には、信州リサイクル製品認定制度による認定品などのリサイクル製品や再生部品、使用後に再使用・再生利用が行いやすい建築資材の採用に努める。

(I)水資源への配慮

a 雨水の利用

雨水貯留タンク等を設置し、治水対策として住宅からの雨水流出の抑制を図るとともに、住宅内の雑用水や植栽への水やりなどへの利用を図る。

b 節水型設備機器の採用

水栓、便器等に節水型機器を採用するよう努める。

(ロ)生活ごみの適正処理やリサイクルをしやすい工夫

生活ごみの分別や保管のためのスペースを設けるなど、ごみの分別やリサイクルをしやすい間取りとする。

生ごみ処理機の導入等、生ごみ等の有機系ごみの減容、堆肥化の促進に努める。

コラム：節水器具の事例

①節水便座

洗浄水量は、JIS規格により8.5又は6.5L以下とされています。節水の観点からは、洗浄水量が少ないものほど優れていますが、給水圧や配管方法が制約されるものもあるため、必要な給水圧や、適用できる配管の長さや曲がり箇所数などの確認が必要です。

また、適切な配管勾配を確保するなど、円滑な排水を十分考慮する必要があります。

②給湯水栓器具

2バルブ混合栓よりも、サーモスタット式混合栓のほうが、温度調節のための捨て水が少なく、省エネルギー効果があります。

センサーにより手を感知する自動水栓や手元で止水できる止水栓付きのシャワーヘッドは、止め忘れ等による無駄が削減できます。

自動水栓



(2) できるだけ長く使い続ける住まいづくり・災害への備え

ア 住宅の耐用性の向上

(ア) 耐久性の高い工法、材料等の採用

構造躯体等について、耐久性の高い工法や材料等の採用に努める。

(イ) 将来の更新の容易性

間仕切り、内外装材や設備等は、維持管理がしやすく、また将来の更新にも配慮したものである。

(ウ) 耐震性能の確保

木造在来軸組工法については耐震壁や筋交いなどを適切に配置し、仮に大地震に遭遇したとしても、できる限り日常生活が継続できるよう、建築基準法による壁量を割り増した耐震性能の確保に努める。

併せて、屋根等への太陽光発電設備の設置を見据えた耐震性能の確保に配慮する。

コラム：大切な家を長く使い続けるために

① 構造躯体の耐久性の向上

住宅の耐久性を向上させるためには、構造躯体として十分な強度と耐久性を確保することが重要です。建設費（イニシャルコスト）が高くては、長寿命の住宅を建てる方が、ライフサイクルコストが低く、環境に対する負荷も小さくなります。

対策の例

- ・ 材料仕様や設計仕様の向上
- ・ 均衡のとれた構造
- ・ 適切な工法の採用等
- ・ 耐久性の高い樹種の採用
- ・ 木材断面寸法の大型化
- ・ 仕口、補強金物等の施工品質の確保
- ・ 湿気や結露等を排除する仕様
- ・ 防水性や耐久性に優れた外壁仕上材の採用

② 住まい方に応じた可変性や更新性

住宅として長く使い続けるためには、内装や設備等の住まい方に応じて可変性や更新性を求められる部分の修繕、交換等が必要となります。修繕、交換等に要する費用や労力を軽減し、住宅全体のライフサイクルコストが抑えられるようにすることが重要です。

対策の例

- ・ 修繕、交換等の必要性、頻度が高い部分を、あらかじめ明確にする。
- ・ 居住者の生活に大きな影響を与えずに修繕、交換等できるようにする。
- ・ 耐久性が十分に残っている部分を壊すなどの無駄な費用が生じないようにする。
- ・ 木造住宅は構造躯体の一部が内装の下地等になっているため、構造躯体に大きな影響を与えずに内装等の修繕、交換等を行えるような構造計画とする。
- ・ 家族構成の変化や加齢などによる住まい方の変化を考慮し、住まい方の変化に応じて変化させる部分と、基本的に変えない部分に分けて考える。

(I)レジリエンス性の確保

敷地の選定に当たっては、事前に市町村等のハザードマップ、各種災害関連法に基づく規制図及び過去の被災情報等を収集・把握した上で、適切に考慮・選択をする。

また、太陽光発電設備と併せた蓄電池の設置により、災害による停電発生時も日常生活が継続できる環境整備に努める。

コラム：V2H

V2Hとは「Vehicle to Home」の略で、クルマに蓄えた電気を家で使う仕組みのことをいいます。

停電や震災等で電力供給が寸断されてしまった場合でも、自動車が蓄電池としての役割を持ち、自動車のバッテリーから電力を取り出して家の電力に使うことができます。

このため、V2Hの普及は自動車の低炭素化のみならず、まちの防災力の強化にもつながることが期待できます。

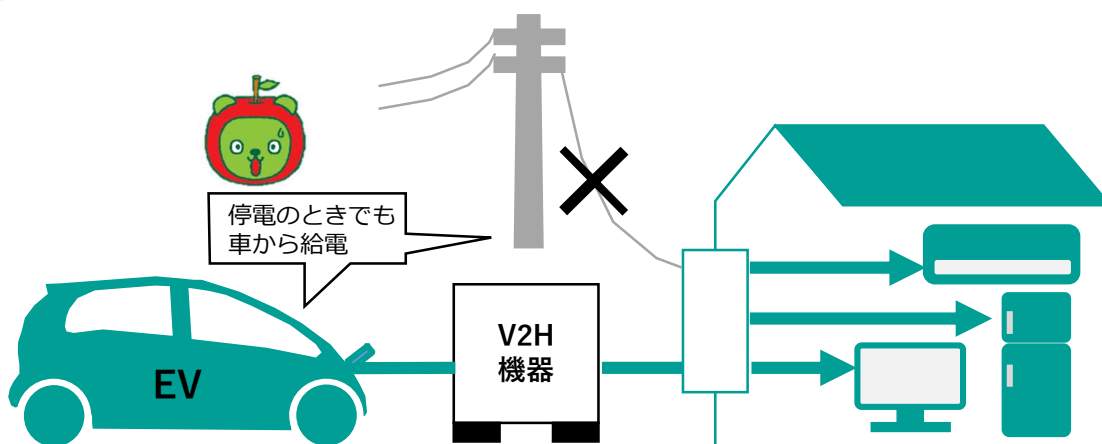


図 V2Hによる防災面での強化

一方、太陽光発電設備と連結しない場合でも、電力需要の低い夜間に車に充電した電力を、電力需要の高い昼間に家で使うことで、電力のピークシフトに貢献します。

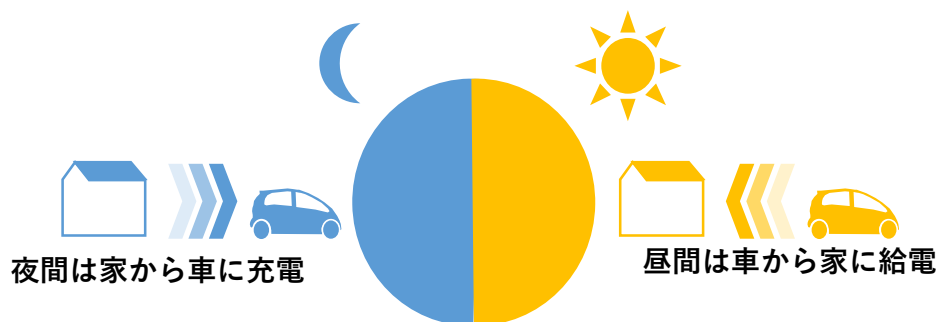


図 蓄電池やV2Hによるピークシフト

イ 誰もが利用しやすい工夫

通路及び出入口の幅員の確保、一体的な利用が想定される部分における段差の解消などの措置（バリアフリー）を講じる。

年齢や身体的な特徴等に影響されない、誰もが利用しやすい意匠（ユニバーサルデザイン）や構造とするよう努める。

ウ 適切な維持管理の促進

(ア)更新の容易性の確保

設備配管や機器の耐用年数、居住者の生活の変化による建築資材の更新を容易にするため、できるだけ汎用性が高い工法・機器等を採用するとともに、改修工事を見据えた設置位置の選定に配慮する。

(イ)住宅履歴情報の整備

適切な維持管理計画を策定するとともに、建築段階、維持管理段階における設計図書や点検・補修記録等の住宅履歴情報の整備に努める。

(ウ)適時適切な修繕・改修

居住者の生活の変化に対応しつつ、社会の良好な資産として維持するため、適時適切な修繕・改修を行う。

3 建築計画に関する取組（自立循環型住宅設計の取り入れ）

ゼロエネルギーの実現を太陽光発電だけに頼ろうとすると、大容量な設備が必要となり、設置費用が多額になることやパネルの製造・廃棄に係る二酸化炭素排出量の増加などに繋がるため、ゼロカーボンの実現に向けては必ずしも有効とは言えません。

まずは、冬期には積極的に日射を取得するとともに、夏期には日射を適切に遮蔽するなど、与えられた自然条件等に配慮した建築計画を行い、設備機器だけに頼らず省エネルギー化することを検討します。

(1) 自立循環型住宅設計の取り入れ

ア 配置・形状・外構の工夫

敷地及びその周辺の良い環境を形成するとともに、季節ごとの日射量や風向きを考慮し、日照や通風を十分利用できるよう、配置計画や外構計画を行う。

イ 屋根、庇等の工夫

季節に応じて日射を適切に調整することができる庇の設置等により、暖冷房負荷の低減を図る。

コラム：信州らしさって何？

季節で着替える住まい

地球温暖化の影響により、真夏の酷暑対策が益々重要となっています。

住まいづくりの上では、外部の熱を極力内部に取り込まない工夫が有効です。適度な庇の出による日射の遮蔽のほか、よしずや簾を掛けるなどの住まい方の工夫で、窓からの日射の侵入を遮り、冷房負荷を軽減することが出来ます。また、外部に設置するブラインドは、日射の侵入を抑制するうえで非常に有効です。外構では南側に落葉樹の中高木を植栽することで、夏場の強烈な日差しを有効に遮ることが出来ます。



樹木による日射遮蔽

ウ 開口部の工夫

季節に応じ適切な日射の調整や外気の取り入れを行うことができるガラス等の仕様選択や開口部の配置、外付けブラインドの設置、よしず・簾の設置など季節に応じた住まい方により、暖冷房負荷の低減を図る。

また、主要な居室に2方向の開口部を設置したり、出入口の引き戸化、高窓や吹き抜け等の設置等により、効果的に通風を確保し、夏期の夜間や中間期などにおける冷房負荷の低減を図る。

コラム：信州らしさって何？

自然の力を活かした住まいづくり 信州の四季と古民家の知恵

古来、信州の住まいは、四季折々に変化する厳しい気象条件のもと、自然の力を利用しながら、豊かに快適に過ごすための知恵に裏打ちされたものでした。

適切な庇の出による夏冬の日射のコントロール、日射熱を蓄熱する工夫、高窓の設置と風の通り道を確保した通風計画など、日射と風の自然の力を活かした昔ながらの住まいづくりの知恵は、環境に負荷を与えず快適に過ごす上で、現代の住まいづくりにも応用が可能な多くのヒントがあります。



換気に威力を発揮する高窓



換気に威力を発揮する越屋根



日射を蓄熱する床

(2) 良好な住環境の創造

ア 室内外の快適環境の確保

(ア)防露・防かびへの配慮

居室の通気・換気性を確保し、また調湿機能を持つ建築資材を利用すること等によって、結露やかび等の発生を防止する。

(イ)室内空気汚染の防止

内装材や防腐・防蟻剤等は、人体や環境に有害な化学物質をできるだけ含まないものを採用するとともに、適切な通風・換気性を確保することにより、室内空気の汚染を防止する。

(ウ)敷地内緑化等の推進

外構の緑化や水面、土面への配慮により、敷地の快適な環境を形成し、周辺地域の良好な環境の形成に資するよう努める。

建物の南側や西側などに中高木の落葉樹等を適切に配置し、季節に応じた日射の遮蔽・取得を図る。

(エ)気候変動への対応（酷暑対策）

夏期の酷暑対策として、開口部対策（日射の遮蔽、通風の確保等）のほか、壁体内等の通気を確保することなど、適切に躯体からの排熱を図る。

(オ)伝統技能の活用

地域の気候・風土・文化に根差した空間や構法・材料などを用いた「和の住まい」づくりの伝承を通じ、豊かな住空間の創出がなされるよう、瓦、左官壁、畳、建具（障子・襖）などの伝統技能を積極的に活用する。

コラム：信州らしさって何？

循環する庭

環境への負荷を軽減し快適に過ごす上で、日射のコントロールは重要です。外構においては南側に落葉樹の中高木を植栽することで、夏場の強烈な日差しを妨げ、冬場の日射に恵みを十分に取り入れる助けとなります。

落ち葉は集めておいて、ぬかを混ぜて堆肥にしましょう。雨水は、縦樋に雨水タンクを接続することで庭の散水などに利用することが可能で、節水対策のほか治水対策のうえでも有効です。

身近な庭で自然の循環を体験することは、子供たちにとっても、資源をできるだけ長く循環させながら利用する「サーキュラーエコノミー」を学ぶ機会となります。



落ち葉の堆肥
出典：農林水産省資料

イ 地域の環境への配慮

(ア)動植物の生息・生育環境の保全・再生

- a 既存の地形や植生を活かし、地域の動植物の生息・生育環境の保全に配慮する。
- b 野鳥の食餌木や地域の植生を考慮した植栽などにより、地域の動植物の生息・生育環境の再生や創出に努める。

コラム：信州らしさって何？

自然を感じる庭 生物の生息環境を確保し、生態系を豊かにする庭

自然環境に恵まれた信州には、多くの野鳥や小動物、昆虫が生息しています。生物の生育環境を確保する庭とすることで、野鳥等の訪れる、自然豊かな庭とすることが出来ます。

CASBEE戸建（新築）評価によれば、住まいづくりの中で評価できる生物の生息・生育に寄与する取組として、次の5つを掲げています。

1つ以上、なるべく多くの取組を取り入れ、生物の生息・生育環境の保全・創出に寄与することが大切です。

- ・野鳥等が地域の中を移動することができるよう緑を連続させることに取り組んでいる。
- ・野鳥等がエサとすることができる食餌木を植栽すること等に取り組んでいる。
- ・野鳥等が隠れたり営巣したりできる空間の確保に取り組んでいる。
- ・野鳥等が水を飲んだり水浴びができるよう水場の確保に取り組んでいる。
- ・より小さな生き物が生息・生育できるような多孔質な資材を利用している。



ナナカマド



コムラサキ



ガマズミ

食餌木の例



シジュウカラ



メジロ



ジョウビタキ

庭で見られる野鳥の例

(イ) まちなみや景観との調和

- a 北側敷地への日影の影響や外壁・屋根の色彩など地域の景観に配慮するとともに、現状の植生や地形を活かした建物形状、外構計画とする。
- b 地域の資源や材料を利用することなどにより、まちなみや景観との調和に努める。
- c 景観育成住民協定や地区計画などの地域独自の景観に関する取決めを遵守する。

(ウ) 良好な地域社会の形成への配慮

近隣への良好な通風や日照、防犯性の向上のための見通しの確保等の配慮を通じ、地域全体の住環境の向上に努めることにより、良好な地域社会の形成に資するよう努める。

コラム：信州らしさって何？

開かれた住まい方 コミュニケーションを育む住まいづくり

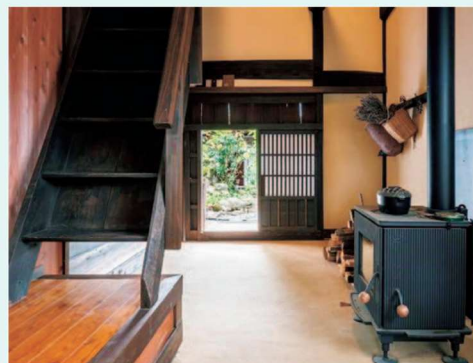
農家などでは昔は、外部と内部の中間的な空間である土間が、近隣とのコミュニケーションの場であったりしました。住居内にあっては、家族が団らんする囲炉裏周りや、可変性のある間取りなどが、様々な状況に応じて、人々の触れ合いを支えてきました。

最近ではオープンガーデンなど、外界との接続空間に開放性を持たせ、親和性を高めている例も見受けられます。

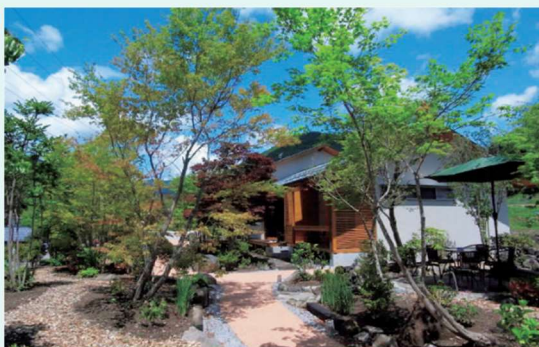
住まいづくりにあっては、適度に開かれ、家族や近隣とのコミュニケーションが図れる環境整備を考えることも大切です。



開放性の高いタイル張りのデッキ



様々な使い方ができる土間



隣戸の庭とつながる小道



オープンガーデン

(I)地域独自の課題への対応

南北に長く標高差も大きい本県は、地域により気候も様々であるため、いずれの地域においても快適な住環境を実現できるよう、克雪等の地域独自の課題への積極的な対応に努める。

コラム：信州らしさって何？

「和の住まい」のすすめ 伝統技能の活用

障子や左官壁、畳、瓦屋根など、伝統的な「和の住まい」の要素は、日本が世界に誇るべき、独自の住文化といえるものです。「和の住まい」の要素を住まいづくりの中に取り入れることで、効果的に居心地のよい住空間を創出することが出来ます。

例えば障子は、「和室」という既成概念にとらわれず、天吊りなどの工夫でバリアフリーへの対応やカーテンのように開口部を全開放することも可能で、洋室にも合う要素となります。県産木材によるしつらえの建具ドアは部屋の質感を高めてくれます。

また、自然素材による左官壁は適度な調湿効果で体にも優しく、耐久性に優れる瓦屋根は二酸化炭素の削減にも寄与します。



優れた耐久性で二酸化炭素削減につながる瓦屋根



県産木材を利用した居間



体に優しい現代漆喰の左官壁



障子を利用した居間

ウ 多様な住まい方への配慮

(ア)世帯構成の変化への対応

適切な構造計画を行い、間取りに可変性を持たせることなどにより、将来の家族構成の変化や複数世帯の同居への対応に努める。

(イ)新たな働き方等への対応

職住一体や在宅勤務など、居住の場の多様化及び生活状況に応じた住まい方の実現に資する平面計画とする。

(ウ)地域とのつながりへの配慮

地域に開かれた庭などのオープンスペースやエントランス部分等の工夫により、近隣とのコミュニケーション形成に資するよう努める。

4 住まい手とつくり手の対話等

(1) 住宅の環境性能や費用対効果等の説明

つくり手は、住宅の断熱性能等の環境性能や、ライフサイクル CO₂ 削減等の環境負荷の低減効果等について、住まい手への適切な説明・提示に努める。

また、健康面における作用効果や生活面における快適性の向上など、断熱性能等の高い住まいの利点を多面的に説明・提示できるように努める。

更に、住まい手とつくり手が新築時における建築費用及び光熱費などのランニングコストについて併せて検討することにより、高い建物性能の実現と環境負荷の最大限の低減を、最小のコストで実現するよう努めるとともに、住まい手の理解が得られるよう、費用対効果の適切な説明・提示に努める。

(2) 住宅の具体的仕様と工事費の明確化

環境負荷の低減とコスト増の最適な均衡を得るため、環境性能を含む住宅の具体的な仕様とその工事費を住まい手が容易に理解できるよう努める。

(3) 住まい手の安心度や満足度の向上

住宅の具体的仕様と工事費の明確化を行うことにより、良質な住宅を適切な価格で提供するなど、住まい手の安心度や満足度の向上に努める。